讃神学園事件

さいわい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
讃神学園事件

【Ｎコード】
Ｎ１９２９Ｘ

【作者名】
さいわい

【あらすじ】
　自称平凡な高校生、吾川蒼輔は、孤島にある讃神学園に転入するため、讃神島を訪れる。讃神学園はエリート教育に力を入れた学園で、それだけにクラス間の対立が激しい学園だった。さらに讃神学園では一年前から学生の失踪が頻発していた。しかも失踪者は船を使った形跡がなく、島から出ているはずがないという。島で知り合った神田京一、住吉穂乃歌と共に失踪者の一人、見澤灯を捜索することになった蒼輔だったが、捜索は難航しやがて行き詰る……。失踪者はどこへ行き、讃神学園ではなにが行われているのか。蒼輔

はやがて自身の思いもよらなかった事実を知ることになる。
（とりあえずストック切れるまでは週一で更新します。土曜日です）

第一話：讃神島

　やれやれ、勘弁してくれよ。

　風が強い。吹き飛ばされそうなほど強い。海風だ。寒い。見渡せど見える風景は変わらない。島が行過ぎて島が行過ぎる。島、島、島。

　そして海。見渡す限り海。

　もう三時間も船に揺られているのか。エンジンの音が喧しい。海を切ってできる白波が船体から長く尾を引いている。

　かもめが二羽飛んでいった。

「俺の名前は吾川蒼輔、１６歳。性別男性。これと言って特徴のない、平凡な高校生、……か。

　向かっているのは讃神島。無人島だった、海岸線長５ｋｍほどの小さな島だ。ここにはある学校がある。というより、学校しかない。私立の大きな学校だ。讃神学園。正式名称ではないが、その学校はそう呼ばれている」

　ん？　なんだありゃ。

　帽子か？

　あんな高いところを……風が吹いたから、誰かの帽子が飛ばされたのか。讃神学校の校章が付いている。

　その後ろを――女の子が走ってる。あの子の帽子か。制服を着てるから、たぶん讃神学校の生徒だろうな。

　あの２階部分も人が入れるのか。景色が良さそうだから、後で俺

も行ってみるか——。
おいおい、あの子、帽子ばっかり見て、危なっかしいな。向こうは手すりもないから、どうかすると落っこちちまいそうだ。
——風が吹いて——帽子がこっちに来た。
女の子は、一目散に帽子を追いかけてる。
空中に向かって足を——
やばいっ

どん！

ってー。腕が痛い。人ひとり受け止めたんだから、当たり前だ。
………どうやら、無事のようだな。
「勘弁しろよ。大丈夫か？　怪我は？」
「すばらしいね。わたし、あそこから落っこちちゃったんだ。君が受けて止めてくれたんだね。ありがとう」
２階から落下したにしては落ち着いてるな。ちゃんと立ってるし、怪我はないようだ。俺の腕は、ああ、ちょっと赤くなってるな。
しかし、よくこれだけで済んだもんだ。受け止める方も、受け止められる方も、最良の体勢とタイミングだった。偶然の女神に愛されたとしか言いようがないな。
「あーあ、帽子が」
この期に及んでまだ帽子の心配か。のんきなもんだ。
帽子は——ああ、ありゃもう無理だな。海に落ちちまった。
「もう諦めろよ」
「命があっただけでも上出来だね」
落胆した様子はなく、ケタケタと笑っている。瞳が大きくて、黒目がちでなにを考えているのかわからない印象を抱かせる。にもかかわらずその目が宿している光は強く、深い。そして表情はどこま

でも穏やかだ。
髪は首筋まで伸ばし綺麗に整えられ、光をよく反射する黒髪だ。時々吹く風にやわらかくなびいている。
「改めて、どうもありがとう」
「別にいいよ。でも気をつけろよ」
「うん。……あれ、君、転校生、つーか転入生だね。何年？　わたし、山輪朱姫（あけひめ）。今度から二年。よろしく」
と、朱姫は敬礼する。
どうして転入生だとわかったんだ？　服装が制服なのは彼女と同じ。その他、目の前の少女と違うところはないはずだ。
「よく転入生だとわかったな」
「てことはビンゴ、だね。理由？　その前に、君の自己紹介は？」
ああ。
「俺は吾川蒼輔。新学期から讃神学園高等部二年に転入する。同学年だな。よろしく」
「オーケイ。じゃ理由だったね。簡単だよ。わたし、エスパーだから」
微笑みながら冗談を言っている。勘弁してくれよ。
「そうか。それなら納得だ。俺もいくつか仮説を立ててみたんだが、外れたみたいだ」
「今の一瞬で？　それはすばらしい。聞かせて」
「1、俺の挙動がそわそわしていたから、島に来るのは初めてなんだと思った」
「ぶつくさ呟いてるのは聞こえたけど、堂々としてると思うよ」
う、聞かれていたのか。
「……内容は聞こえた？」
「風鳴りがひどかったから……。えっちぃ内容だった？」
昼間から下ネタを呟く人間がどこにいるんだ。

「なわけねーだろ。でもそれも仮説の一つだ。ちょっと島についておさらいしてたんで」
「聞けば君が転入生だとわかるような内容だったわけだ。でも、聞こえなかったから違う」
「3、ただの勘」
「合理的。でも外れ」
「その4、君は実は超絶記憶能力者で、全校生徒の顔を記憶している」
「それはすばらしい解答だね。でも、わたしが一番苦手なの、暗記科目なんだ」
「5、山輪は――」
「朱姫でいいよ。その代わり、わたしも蒼輔って呼んでいい？」
おいおい、勘弁してくれよ。
「わかった。朱姫は転入生が来ること、及びその顔を知っていたのかもしれない――職員室で書類を見たとか」
「うちは個人情報の取り扱いにはうるさいんだけど……、ま、可能性はあったかもね。でも違う」
「どういう意味だ？」
「後で言う。それより、仮説はもうおしまい？」
「あとひとつだけ……。」
どこかで前に俺と君は会ったことがある？」
「あ、最後の最後でナンパ？」
「ちょっとお茶でも飲むか？」
やれやれ、なにを言っているんだ俺は。
「初対面だと思うんだけど、蒼輔は違う？」
「いや、言ってみただけだよ。さて、俺のカードはこれでおしまい」
「じゃ、解答編だね。さて皆さん、ていうか蒼輔、答えはこれ」
朱姫は自分の左襟を指差す。

「これはピンバッジで、在校生の学年とクラスを表すものなんだ。わたしはこのデザインで、線が一本だからこないだまで一年だったってこと」
「なるほど、それをつけていない人間は在校生ではないということか」
「バッジはクラス替えしたあとの最初のホームルームで貰えるから、きっと蒼輔もそのとき貰えると思う」
「でも、今は春休みで学期の間なんだから、外してる生徒もいるんじゃないのか？」
「もちろんそういう子もいると思うけど、どうせ新しいのを貰うとき古いのを返さなきゃならないから、つけっぱなしの子が多いんだよ。だから、制服を着ているのにバッジをつけていない人間は、新入生か転入生ってこと。
　以上、　証明終わり」
　やれやれ、聞いてみれば簡単な話だ。

「そういや、さっき、個人情報の書類がどうこう言ってたけど、あれは？」
「ああ、転入生の情報だね。わたし、こう見えても生徒会やってんだ」
「へえ、生徒会長とか副会長とかってやつ？」
「そんな恐れ多い。わたしがやるのはもっぱら雑務だけだよ。でも、だから先生から転入生の情報を先に教えてもらう可能性はあったってこと。お世話してあげてって言われるとかね。
だから、いつでも頼ってね。わたしはあんまり頼りにならないかも知れないけど、会長とか副会長はすばらしい人たちだから」
　生徒会か。
　右も左もわからない転入生が学園のことを調べるのに都合がいいな。

「だったら、ちょっと讃神島学園のことをおさらいしておきたいな」
「いいよ。讃神島学園は私立の総合学校。正式名称は私立忽那学園讃神分校。忽那学園って言うのは国内有数のマンモス学校」
「国内各地に分校があり、総生徒数は五万人を超えるといわれている。いわゆるエレベータ式の学校で、その種類は小等部から大学まである、だったか？　高等部は分校によって、普通科、商業科、工業科、農業科、その他何でもござれで揃っている」
「残念、確か、保育園も兼ねる幼稚部もあったはずだよ」
「ほんとに何でもありだな」
「忽那学園の特色はその雑多性にあるよ。ある平均的な人間を育てるのではなく、たった一つだけでも特化された能力の持ち主を育てようというのがその教育態度の根本にある」
「おかげで、各界のエリートに、忽那学園の出身者は多い。例えば、プロ野球選手の一割が、学園出身者だとか、国内外で賞をとる芸術家や、科学技術界の権威の多くが忽那学園に関わったことがある人間だとか言われている」
「一番どこにエリートを輩出しているか、知ってる？」
「官僚、だったか」
「正解。特に、昔はそうだったって。忽那学園を国家公認の学園にするために、昔は官僚輩出のための教育に力を入れていたんだって」
国家経営に最も実質的に携わることのできる官僚を多く輩出していれば、学園経営に圧倒的に有利だ。
「ということは昔は国家公認——つまり社会で学歴として通用する学園じゃなかった」
「そう。学園自体は戦前から創設されたんだけど、それはあくまでも私塾で、国家公認の学園になったのは戦後数十年経ってかららしいよ」
「ただ、忽那学園のすごさは、国家の教育方針に合わせたんじゃなく、国家に自分たちの教育思想を認めさせたところだな」
「そのための官僚育成。全く、とんでもない話だよね」

「現在は権力志向をする必要もなく、総合学習を行う国内有数の私立学校としてその名を轟かせている、か」
「有名なだけに、外からの転入生も多いよ。蒼輔もその一人だね」
「そういうことだ。開かれた学校なのは、多くのとがった人物を育成しようという学園の思想とも関係があるんだろうな」
「他校で育った、恵まれた才能を持ちながら普通の学校ではその才能を伸ばすことが難しい人間。そうした人たちの受け皿としても、忽那学園は機能してきた」
「国家教育の否定が根本にあるんだから、いいことだけでもないんだろうけどな」
「でも公認は受けているんだから、ちゃんと学習指導要領は満たしているはずだからご心配なく」
「忽那学園自体についてはこんなもんか。讃神学園は、普通科の学校なんだよな」
「そう。いわゆる中高一貫校で、高等部は普通科。国家公認になる前からある、忽那学園としては古い学校で、孤島にあるのは学習に集中できる教育環境の提供のためだとか」
「そんなんで孤島に住まわされるのは勘弁してほしいけどな」
「そのおかげか、優秀な人はすばらしく多いよ。蒼輔もそう？」
「まさか。俺は可もなく不可もない人間だよ」
「蒼輔は讃神学園に来るの嫌だった？」
「別に、そんなことないけど」
「不安とか苦しいことがあったらなんでも言ってね。生徒会は生徒の悩み事何でも聞きますってとこだから。学生相手がいやなら、学校カウンセラーも多く配置されてるし」
「讃神島自体は、無人島だったんだよな」
「戦後すぐ学園が設立されるまでは、ね。だから学園以外の民家みたいなものは何もない島だよ。戦中、軍事基地が置かれる計画があ

ったみたいだけど、結局お流れになっちゃったって」
「要するに、何も無い島だな」
よくわからない励ましだな。
「大体こんなところか。うん、よくわかった。ありがとう」
「どういたしまして。ついでにクラスの話もしとこうか。蒼輔はどのクラスになりそう？　わたしは多分緑だと思うんだけど」
「緑？」
「組のことだよ。このバッジ、色が緑でしょう。バッジでクラスは色と形で表すから、クラスのことを色で呼ぶことが多いんだ。色の種類は赤・青・黄・緑。かける形が三種類で全十二クラス。ちなみにクラスの色によって、生徒の大体の傾向があるんだけど」
話好きな子だ。友達が多いだろうな。
「どんな？」
「評価の優秀な順に、赤・青・黄・緑。赤がトップで、青はそれと同等か少し下くらい。黄はまずまず、かな」
「朱姫の緑はどうなんだ？」
「ええと、そうだね、まずまずよりほんの少しだけ下というか、人間やっぱり楽しいのが一番というか……」
要するに馬……いや、言葉にするのは止めておこう。
「三種類っていったのは、学業組と運動組と芸術組に分かれるからで、内訳を言うと、本が学業、靴が運動、筆が芸術」
「クラス決めの際の評価の対象がこれになるわけだ」
「もちろん、組が違うからといって特別なカリキュラムがあるわけじゃなくて、生徒の特徴の傾向がそうだというだけの話だけどね」
「だけど、忽那学園の特色からいって、その傾向ってやつが重要なんだな」
「そういうこと。わたしはなったことないからよくわかんないんだ

けど、運動組とか芸術組は勉強しなくてもほとんど指導されないって聞いたことがあるな」
他の学校でいう、特待生みたいなイメージか。
「四色×三つの形だな、よし。
朱姫は学業組、というより一般的な学生のクラスか」
「そう。といっても、あくまでも傾向という話で、実際は運動が得意じゃない子でも運動組に入ることはあるし、成績優秀な人でも緑になることもある」
「――自分みたいに成績優秀な人でも、か？」
「ピンポン大正解」
……おいおい、目が泳いでいるぞ。
「で、どう？　蒼輔はどれになりそうだと思った？」
「さて、自分で自分のことを評価するのは難しいからな。運動にも芸術にも縁がないから、おそらく普通組だろう。成績は、別に優秀ってわけでもないし、かといって馬鹿ってわけでも……あ」
「馬鹿って言っちゃった」
「馬鹿って言っちゃった」
「…………」
「…………ごめん」
「いえいえ」
「とにかく全体的にそれなりだとすると――」
「黄色、かな。ま、もちろん実際のクラス分けは成績がダイレクトに反映されるわけじゃないからピンキリなんだけどさ」
「なら、俺が緑になる可能性もあるってわけだ」
「同じになるかなあ。そうなったら嬉しいね」
……緑になるのは、困るんだけどな。
「あのさ蒼輔、ちょっと聞きたいんだけど、やっぱりわたしと君って、どこかで会ったことがない？」
「今度は朱姫がナンパか？」
「今からお茶でもどう？　島に喫茶店なんてないけど」

おいおい。
「会ったことはない、と思う。けど会ったことがあるような気がするのもほんとだ」
「すばらしいね。わたしも一緒。ほんとにどこかで会ったことがあったりしてね」
どういうことだ？　二人揃って記憶喪失か？
「前世かどこかで会ったことがあるのかも知れないな」
「運命ってやつかもよ。でもだったら、わたしとしてはあんまり好ましくないな」
「そうなのか？　女の子ってのは運命って言葉が好きなんだと思ってたけど」
「運命なんて嫌いさ。人の人生ってもんは自分で切り開いくものだとわたしは思う」
「強いな」
「うーん、まあいいか。これからよろしくね、蒼輔」
「こちらこそよろしく、朱姫」
握手する。
……ん？
「何か聞こえない？」
「何か――声？　怒鳴り声だ」
「室内からみたいだね」

第二話：対立

音に驚いて蒼輔と朱姫は船室のドアを開ける。
おいおい、なんだこりゃ。

机と床がこすれる乾いた音が響いた。続いて人間の体が壁に叩きつけられる音だ。振動が船体に伝わって、船が大きく揺れる。
どうやら喧嘩らしい。客室は机と椅子が散乱し、整然としていた様子は見る影もない。室の端に怯えるようにして幾人かの人間。そしてその視線の先には二人の人間。
壁際でうずくまっているのが殴られた人間で、その前に仁王立ちしているのが殴った人間だろう。両名とも学生のようだ。

「てめぇ、ぶっ殺してやる」
物騒な声室内にこだました。十代の若造が出しているとは到底思えない。
が、当の本人は学生服を着ているからほぼ間違いなく学生だろう。殴りつけた相手が起き上がる前から、追撃の手を加える。
まずいな、このままだと大事になるかもしれない。
殴られているほうはもう意識を失いかけている。
よく見れば殴っているほうも服装が乱れ口の端が切れている。一方的な喧嘩だったというわけじゃないらしい。
だが現状はよほど一方的だ。ルールのある決闘なら既に審判が止めに入っているだろう。ここらで収めなければ、これはただの虐待だ。
周りを見れば、誰も彼も怯えるばかりで止めに入ろうとする者はいない。

――全く、勘弁してほしいもんだ。初日早々、こっちは島に着いてすらいないんだぜ。

ん？　朱姫の様子がおかしいな。

どうやら飛び出そうとしているらしい。怯えてるかと思ったら、勇敢なんだな。

確かにこの場は納めなければならないが、か弱い女の子がやる仕事じゃない。

やれやれ本当に、勘弁してほしい。

騒ぎに巻き込まれるなんて、得策じゃないんだ。

朱姫を手で制し、飛び掛る。

よ、と。

殴ってるやつを、後ろから力ずくで引き剥がす。

「なにしやがる！」

おっと。腰の入ったいいパンチだな。だけど俺に当てるには、百光年遠い。

パンチの勢いを利用して、大外狩りを決めてやる。投げ飛ばした後は、横四方固めだ。

やれやれ、そんなにジタバタすんなって。動けないだろ、どうせ。

お、なるほど、こいつもバッジつけてるな。赤い。

「いきさつは知らんけど、この辺にしとけって。近所迷惑だろ」

……。

ふう、漸く諦めてくれたらしい。

さて、こいつはどうしたもんかな。

「蒼輔、すばらしいね」

「朱姫か。これ、どうすりゃいい？」

「どうって……どうしようか。あんまり、おおごとにはしたくないんだけど、こう公の場でやられちゃうと、そうも行かないよね。先生には報告しとくよ。もう離してあげたら？」

暴れた人間は大人に引き渡して一件落着か。
ま、そんなとこかな。
「じゃ、わたしは行くね」

さて、こいつはもうそろそろ離しても大丈夫か……。
ぞく。
なんだ、この感覚――？
！
紙一重のところで、背後からの一撃を交わす。
交わすというより、受け止めるといったほうがいいかもしれない。
さっき殴られていたほうのやつだ。手になんか握ってる。
勘弁しろよ。
こいつはナイフじゃないか。
切っ先には触れないように交わし、腕の部分を抱え込むように受け止める。
やれやれ、危なかった。
俺を狙ったんじゃないな。
こいつへの反撃か。
悪いがこんなもんはこっちに渡してもらう。
ぐいと、ひねりあげて、手に持っていたものを奪いとる。
おいおい、こりゃ――バタフライナイフ、だな。学生が護身用に持ち歩くには、ちょっと度の過ぎたもんだ。
こいつ、なんでこんなもん持ち歩いてんだ。
しかも、さっきの感覚……俺の感覚が正しければあれは殺気だった。単なる感情任せの怒りや憎悪じゃない。ただ相手を殺すということだけを考えた気配だった。
そんなもん、ただの学生から感じる気配じゃないぞ。
ん！
……思わず、跳ね飛ばしちまった。

こいつ、なんて目をしてやがる。ただ冷酷な、殺人鬼の目だ。なんだよこりゃ。勘弁してくれよ。

「大丈夫かよ、お前」

荒い息が次第に収まっていくとともに、目のぎらつきが薄まっていくのがわかる。

徐々に普通の少年の顔に戻っていく。

興奮に身を任せての所業、か。

キレる若者かよ。こえーこえー。

どうやらナイフのことは周りにはばれてないみたいだな。

気づかれないように……よし、懐にしまいこめた。

もう興奮は収まったようだな。今はただの落ち込んだ人間の目だ。

「そんな気にすんなって。こいつのことは、黙っててやる。だけど、こんなもんは没収させてもらうからな」

「蒼輔、大丈夫？」

朱姫か。後ろに大人たちも見える。朱姫から説明を受けた教員たちだろう。

大人たちが、それぞれに暴れたやつらを引き取っていった。これから島に到着するまで、彼らの監視下に置かれるんだろう。

「殴られたほうにも襲われたよ。気性の荒いやつの多い学校だな」

「大丈夫？　怪我はない？」

「ああ。やれやれ、なんて学校だ。転入したら最強伝説でも作っとくか、こりゃ」

「こんなときに冗談言えるなんて、蒼輔、なかなか度胸があるんだね」

「そっちもな。闇雲に飛び出そうとしやがって、おかげで俺がとばっちりだ。勘弁してほしいな、全く」

「でも蒼輔、かっこよかったよ？」

よく言うぜ。

……そう？
「うーん、あのふたり、ちょっと興奮が過ぎたみたいだね。どう蒼輔。大騒ぎにするつもり？」
「朱姫はどうなんだ。生徒会の一員として、どう収めるつもりだ？」
「そうだね。会長に相談かな」
他人任せかよ。
「先生たちには、生徒会に一任してくれるようお願いしてみるつもり。人望あるからね、生徒会長は。だから問題は、蒼輔が胸に収めてくれるかどうか」
「大事件にするつもりはないよ、俺も。……だが」
さて、このまま放っておいていいのか？
「蒼輔の気持ちもわかるよ。だけど、ちょっと後で話せないかな。判断する前に、聞いておいてほしいことがあるんだ」
「どんな話だ」
「ネガティブな話だよ。うんざりする」
「そりゃ勘弁願いたい。そうも行かないんだろうが」
「ビンゴ」
自嘲気味に笑った後、周りで見てる大人のほうに向かっていった。まだ何か大人たちと話があるんだろう。
とりあえずは落着か。

コーヒーでも飲みたいな。自販機は……あった。
全く、初日早々こんな事件に巻き込まれるなんてな。
やれやれ、勘弁してほしいな。
……ん？
誰だこいつ？
「よう、大した捕り物だったな。やるじゃねえか」
よれよれのシャツに、ジーンズ……年齢が判別しづらいな。俺たちと同じくらいにも見えるが、もう少し上かもしれない。長髪が少

しうざったい男性だ。
「あんたは？」
「俺か？　見ての通り、教師だ」
「どこをどう見りゃ教師なんだ？」
「手厳しいね、こりゃ。童顔は生まれついてのもんだってのによ、どいつもこいつも人を子供に見やがって。俺、中二まで電車子供料金で乗ってたもんさ」
なんだこいつ、酔っ払いか？
う、ちょっと酒くせえ。
「昼間っからビールかよ」
「おお、大人がビール飲んで、なにが悪いってんだよう。こちとら、とうに二十歳は超えてますーだ。もっとも、二十歳前から飲んでましたがねーっとこりゃ」
……勘弁してくれ。
「おぉっと、どこ行くんだ少年。おぢさんの話はまだ終わってないぞぉ」
「俺はあんたに用がない」
「手厳しいね、こりゃ。少年、身のこなしは誰に習った？　高校程度であれだけやれりゃ、なかなかのもんだ」
「そりゃどうも」
「褒めてねえよ。少年、いいか、能ある鷹は爪隠すってもんだぜ。それが、おめぇ、こんな酔っ払いに手の内知られちまってる。駄目だぜぇ、少年。失格」
何が失格だよ。
「ただのまぐれだよ」
「まぐれまぐれ、マグレねぇ。まぐれも実力のうちってな。どうだ少年、強くなりたかったら俺の弟子になってみんか」
別に強くなりたかねぇ。
「……あんた、何もんだよ」
「まず自分から名乗ったらどうだってんだ」

ちぇ。そっちから絡んできたくせに。
「高等部二年の、吾川蒼輔だ。この春から転入する」
「転入生か。なるほどなあ。いいだろう。俺は石手博通ってんだ。科学の教師やってる。俺はこう見えて、昔達人と呼ばれた人間なんだ」
「達人だと？」
「そうさぁ。酔拳の達人。アチョー」
………なんだただの酔っ払いか。
「しょーねぇん、ちみもいっぱしの格闘家になりたかったらおぢさんの門をくぐれ。そして滝にうたれ……おぉい少年、どこへ行く」
……付き合ってられん。

甲板だ。少し風も収まってきたようだな。
しかし転入早々、いや転入前だというのに目立ってしまうとは、何たる失態。
有名になるのなんて、勘弁してほしいんだけどな。
ん、誰かが手を振ってんな。
「蒼輔、こっちこっち」
朱姫だ。
「へさきで何やってんだ」
「ほら蒼輔。豪華客船ごっこ」
誰がやるか。
「朱姫、先生たちの説得はどうだった。納得してくれたのか？」
「まずまず、だね。全員、おおごとにはしないってさ。いったでしょ、うちの会長は人望が厚いんだよ」
「讃神学園の生徒会には大分権限があるようだな。話っていうのは、そのことか？」
「ううん。会長の話は、おいおいとね。うんざりする話っていうのは、讃神学園に広がる対立のこと」

「どういう話だ」
「クラス別けの話はしたよね」
「ああ。クラスは色で表され、赤が鼻持ちならないエリート、赤がその下に甘んじる集団、黄が中途半端、緑はバカだっけか？」
「すばらしく悪意のある記憶の仕方だね。性格疑うよ」
「冗談ということにしといてくれ」
「ということにしておいてあげよう。でもその悪意のある捉え方で正解。要するに、多くの生徒が、そういった悪い捉え方をしている。するとどうなるか」
「他クラスに対する侮蔑と、自己嫌悪」
「半分正解。人間、なかなか自分の欠点にまで目が回らないもんだよ。目が回らないというより、認めることができないんだな。結果、他クラスに対する侮蔑だけが残る」
「そして自分たちのクラスに対する愛級心が生まれ、自クラスの他クラスに対する愛護意識が強くなり、最終的には他クラスに対する敵意が生まれる、か」
「そう。だから、讃神学園には今ものすごいクラス間対立が生まれているの。特にひどいのが赤と青。お互いにエリート意識があるぶん、敵対心も強いみたい」
「俺はそんなところに転入するのか。なるほど、勘弁してほしい話だな」
「さっき喧嘩してた二人——蒼輔が止めてくれた二人も、それぞれ赤組と青組だよ」
クラスの対立の結果が、さっきの殴り合いか。
「ちょっと待てよ。クラス別けっていっても、流動的なんだろう？朱姫は新学期どのクラスになるかわからないって言った。要するに、クラス替えがあるってことだ」
「そう。クラス替えは学期ごとに行われるよ」
「だったら、クラス内のメンツはいつも違うことになる。だったら、身内意識なんて生まれようがない……少なくともそれほど生じない

はずだ」
「そうだったらよかったのだけど……むしろ、だからこそそのエリート意識なんだな。特に赤組と青組はかなりその間で生徒が行き来しているの。だから、赤組に残れずに青組に行った生徒を青組は差別するし、自分たちを見下す赤組を青組は憎悪する」
「エリートも大変ってことだ」
「その点緑はバカだから安心――ってなに言わせるのさ」
俺はそこまでは言ってねえ。
「わかっておいてほしいんだけど、例え学期が変わって別のクラスになったとしても、それは何らかの栄誉だったり落第だったりするんじゃなくて、それはただのクラス替えなんだ。クラス別けに傾向があるって言っても、それはあくまでもそういう傾向があるってだけの話で。成績優秀な人が赤組になることも、黄組になることもある。緑に来る可能性だってある。クラス別けによる階層化なんて、ほんとは生徒たちの噂に過ぎない。だけど、一部の生徒にとってはクラス別けがある種のステータスになってしまっている」
「噂が弊害を生む。閉鎖環境じゃよくあることだな」
「蒼輔もその閉鎖環境の一員になるんだけどね」
「勘弁してほしい話だ」
「だから私は――ううん、生徒会は何とかその対立構造を解消しようとがんばっているんだよ。まだ成果は挙げられていないけど、いつか何とかするから――」
「だから今回は見逃せってか。俺の意見を言っていいか？」
「虫が良すぎるって言うんでしょう？」
「いや、朱姫と生徒会の決意には拍手を送りたいくらいだよ。だが、いつまでも潜在化させておいたら、いつか思わぬ形で決壊するかも知れない。ダムの決壊は、水を溜めていればいるほど規模が大きくなるんだ」
「……うん、わかってる。その前には必ずなんとかする」
だが、さっきの生徒のナイフと、殺意。

意外と決壊の時は近いのかもしれない。
どうする?
もしここで反論するのなら、俺もこの問題に主体的に関わらなければならなくなる。
できればそれは勘弁なんだよな。
「わかった。朱姫と生徒会を信用する」
だが——それでいいのか?
せめてナイフくらいは、渡しておいてもいいかもしれない。
だが、おおごとにしたくないという朱姫の気持ちも理解できる。
本当に、今大騒ぎしなければならないほどの問題なのか?
「ありがとう。大丈夫だよ。私はともかく、会長と、副会長はとてもすばらしい人たちだから。蒼輔は、蒼輔の学園生活を送ることに専念して」
そうだ、それはその通りだ。この問題は、俺には何の関係もない。
だが、本当に、それでいいのか?
「朱姫」
「なあに、蒼輔」
「いや、がんばってくれ。俺にできることがあったら何でもする」
蒼輔に言えたのはそれだけだった。——————

——————白い雲、青い空、か。
やれやれ、なんだかいやな予感がしてきやがったぞ。
……ようやく島が見えてきたな。
讃神島。
俺がこれから暮らす場所、か。

第三話：上陸

微かに体が前へ投げ出されそうになるのを感じる。慣性の法則だ。
船が減速を始めたらしい。船体の周りに白い波が立ち始める。
どうやらやっと到着らしい。
やれやれ、長かったな。
「うん、無事に到着したね。蒼輔、讃神島にようこそ」
「……わざわざ丁寧にどうも」
「うん、すばらしいね」
何が素晴らしいんだよ。
……やれやれ、いい笑顔だな。
島に来た最初に朱姫みたいな気さくなやつに会えたのは幸運だったのかもしれない。単純に、一人でも知り合いができたってのは助かる。
さて、ここからか。

「蒼輔は、これからどうするの？」
「第一寮ってとこに向かうらしい。迎えが来てるはずなんだけど」
「……誰もいないね」
もう船着場には下りてるんだし、迎えが来てるんならここらにいても良さそうなもんだ。
「遅れてるのかな。どうする？　バス使う？」
「バス？」
「うん。讃神島内を巡回してるバス。学生は普段、これを使うよ。歩くと結構広いからね、讃神島は」
「バスは寮にも向かうのか？」
「もちろん。もし時間があるんだったら、わたし学園内を案内してあげてもいいよ。うん、すばらしい考えだ。そうしようよ」

「そりゃありがたいけど、朱姫に悪い」
「別に悪くないよ。……あーでもそっか、わたしこれから学生部に行かなくちゃならないんだったな。あーあ残念」
「学生部って？」
「生徒会のある場所。さっきの喧嘩、ちゃんと会長に報告しとかないとね」
「大変だな、生徒会ってのも」
「讃神学園はね、生徒自治っていって、学生で解決できることは学生で解決しろって校風だから。結構生徒会には権限が強いよ」
「そんな生徒会に入っているわたしってすごい」
「そうそう、すばらしいねわたし――じゃなくって、生徒会長や副会長はそれだけ有能な人だってこと」
「ふうん」
「どう蒼輔。わたしについてきて、生徒会見てみない？　それともいっそ生徒会に入っちゃう？　うん、それはすばらしい」
「勘弁しろよ。生徒会なんて柄じゃない」
「そうかな。瞬く間に生徒の喧嘩を仲裁しちゃった人なのに」
参ったな。やっぱり目立ったのはまずかった。
そういう評判を立てられるのは勘弁願いたいんだが。
「朱姫。そういうことは、あまり人に言わないで貰いたいんだけどな」
「どうして？　蒼輔が活躍したのは事実じゃん」
「できれば目立たないで過ごしたい」
「あーあ残念。もったいないないよそういうの」
「引っ込み思案なんだよ」
「引っ込み思案、ねえ」
なんだよその目は。
「似合わないと思うけどな。蒼輔、生徒会が嫌なら、部活やりな。蒼輔ならどこでもエースになれると思う」
「だから、そういうのは勘弁。それにあれはまぐれだよ」

「まぐれねえ」
なんか疑うような目つきだな。
やれやれ、こういう活発な人間は、こういうところが面倒なんだよな。大人しくしていたい人間の気持ちがわかっちゃいない。
「まあいいや。まぐれということにしといてあげよう」
「ということにしといてくれ。だから生徒会も部活もやらない」
「運動会実行委員とか文化祭開催委員とか各種サークル活動とか」
「やめておく」
「クラス対抗合唱コンクールとか校内俳句大会とか色別対抗球技大会とか」
「興味ないね」
「ツンツン頭か。だったら目指せ大学一直線？」
「勉強は嫌いだ」
「……蒼輔、讃神学園に何しに来たの？」
さすがに朱姫も呆れた目だ。
そういう目で見られるのは、さすがにきついな。
「俺は日々が平穏に過ごせればそれでいいよ」
「あーあ、緩やか日常系ほのぼのコメディがお望みなわけだ」
「何のジャンルだよ」
「じゃ、蒼輔は謎のある、周囲に対してちょっと冷たい、けれど実は誰よりも友情に厚い転校生役ね」
「役って何？」
「で、わたしは幼馴染でおせっかいな、そのくせちょっとドジなヒロインで」
「なんで幼馴染？　転校生に？」
「まずいよ蒼輔。男の子と女の子が登場したら必然的にラブコメになっちゃう」
「そんな決まりごとはないよ？」
「うーんうーん、そうだ蒼輔、女装して」
「それで何の解決になるんだ？　別のジャンルになるだけだぞ？」

「あくまでもまったり男子高校生日常コメディがお望みなわけだ」
「いや別にそんなもん望んでない」
「いっとくけど蒼輔、ほのぼのコメディの需要があるのはそれが女子高生だからだからね。蒼輔みたいなそこそこかっこいいだけの、よく言えばまとまった、悪くいえば何の変哲もない男子学生まったり学園コメディなんて、十週打ち切りまっしぐらなんだからね」
「大丈夫だ朱姫。これは漫画じゃない」
そうだ、漫画ではない。
「ま、蒼輔の人生だからとやかく言わないけど、何もない学生生活ってのはつまらないと思うよ」
「そりゃそうだろうけどさ」
「讃神学園って、他校から生徒集めてるだけあって、いろんなことのレベルが高いんだよね」
「知ってるよ。どの運動部も全国大会出場の常連校なんだろ？」
「うん。そりゃ、他校からエース引き抜いてくりゃ強くもなるよねって話だけど」
「金持ち球団みたいなもんか」
「けど讃神学園は運動部だけじゃないよ。文化部もある。それに集めてくるっていっても何もエリートばっかり集めるわけじゃないのが讃神学園だから。レギュラーになれなくても頑張ってる学生はたくさんいる。ま、蒼輔はすぐレギュラーだろうけど」
「そんなわけないだろ」
「はいはいまぐれまぐれ」
くそう扱いがテキトーだ。
「部活が嫌な子はサークルに入るっていう手もある。いろんな子が集まってるだけに、小さいサークルが結構あるみたいだよ」
「ふうん。孤島だっていっても、することはたくさんあるんだな」
「勉強だって、先生方はかなり熱意を持って教えてくれるし、図書館には学術書も揃ってるから、やる気になれば大学レベルの研究だってできちゃうよ」

「……怖い学園だ」
「うん、だから、やる気になったら何でもやるといいよ。卒業するときに何も思い出がないなあってなったら、やっぱりさびしすぎると思うから。讃神学園なら、やる気になればいつでもなんでも打ち込めるから」
「わかったよ。やる気になれば、な」
「うん、すばらしいね」
やれやれ、またニコニコしてる。
「あ、生徒会だったらいつでも歓迎するからね。といっても雑用くらいしかすることないけど」
「だからそれはいいって。……バスはまだいいのか？」
「本数少ないから、結構待たされるんだよね。蒼輔の迎えも、まだ来ないみたいだね」
そうなんだよな。やれやれ、勘弁しろよ。
どうする？　本当にこのまま朱姫に同行するか——
「吾川蒼輔だな」
——ん、誰だ？

振り向くと白衣の女性が立っていた。年のころは三十を少し超えたくらいだろうか。
学園という単語にはおよそ似つかわしくない腰まで豊かに垂らした金髪に、くるぶしまで隠れるほど長くあつらえた白衣。蒼輔と目線が合うくらい、女性としては長身で、右手を頬にあてがい微笑をたたえ余裕のある表情を作っている。
「誰だ？」
「だーれだとはなんだ誰だとは。このかわいらしくも美しくかわいい美貌の女性の顔を忘れたとはいわせんぞー」
いて、いて。
頭を押さえつけてくるなよ。

「清美先生じゃないですか」
朱姫の声だ。
「あーら、そこにいるのはかわいいかわいい朱姫ちゃん。どうしたの今日はまた一段とかわいらしい。どこ行ってたの？　いいよねえ学生は春休みがあって。……なでなでなでなで。ああ、やっぱりいいわかわいい子は。かわいくない男子高校生なんて相手にしたくないわよねえ」
「あ、ちょっと、やめ、なでないで」
「やめろよ、朱姫が困ってるだろ。梅本清美おばさん」
「おばさんはやめな。おねいさん！」
やれやれ、これはまたありきたりな。
「おばさん？」
あーあ、なでなでのせいで朱姫の髪が乱れちまってる。ひどい人だな。
「ああ。梅本清美はれっきとした俺のおばさんだよ」
「だーからおねいさんと呼べって。全く、かわいくない甥っ子だこと」
「へえ、清美先生に甥っ子さんがいたなんて知りませんでした」
「そうなのよね。私もこんなかわいくない年齢まで成長しちまった甥っ子がいるなんて認めたくなかったんだけど、この春から讃神学園に転入するっていうじゃない？　だから叔母甥の関係でよろしくお願いされちゃったわけ。お願いされちゃったって、どうすりゃいいのって話なんだけど」
「寮まで送ってくれりゃいいんじゃねえの？」
「そういうことじゃねえっての」
いてえ。頭を叩くな。
「ったく、そんなんでほんとに養護教諭なんてやれてんのかよ」
「うわっ、こいつはほんとにかわいくないなー。ほれほれ、この白衣が目に入らんのか」
「だからなんだよ」

白衣が仕事するわけじゃないぞ。
「ね、ね、朱姫ちゃんからもなんかいってやって。私がいかにかわいらしい仕事ぶりを発揮してるかを」
「そうだよ。清美先生はすばらしい先生だよ。生徒たちによく話しかけてくれるし、ほら、自分のことを気さくに清美先生って呼ぶことを強要したり」
強要はするなよ。
「それに男子とか、清美先生に診てもらいたいってよくわざと怪我したりとかしてるよ」
「……マニアだな」
「なんか言った？」
「なんでもございません、清美おねいさま」
「よしよし、ちっとはかわいらしくなった」
やれやれ、勘弁してくれ。
「……で、どうして朱姫ちゃんと蒼輔が一緒にいるの？」
「島に来る船で一緒になったんだよ。ここに来るまで相手してもらってた」
「そうです。またすばらしい友達が一人増えました。あ、そうだ清美先生、船の中で蒼輔、かっこよかったんですよ」
「えーなになに聞きたーい」
「朱姫、だから、そういうことは人に言うなって」
「えー、いいじゃん」
「駄目だ」
「うーん……。どうしても駄目？」
「駄目」
「むー……。あーあ残念。そういうことで清美先生、今のは聞かなかったことにしてください」
よし。
ん？
なんだ？　この梅本の詮索するような目は。

「……ふむふむ、ずいぶんとかわいらしく仲のよいことだねえお二人は」
なにを言っているんだこの人は。
「はい。すばらしいです」
「朱姫ちゃんは会長と付き合ってるんだと思ってたけどねえ。違うんだ」
なんだと？
朱姫が生徒会長と付き合っている？
「え、ちょ、先生、何いってるんですか。違いますよ」
あ、違うのか。なんだ。
……だからなんだ俺。
「でもさー。蒼輔はやめといたほうがよくない？　だってさー、覇気もないし将来性もない。一緒にいて面白くもない。何よりほら、見て、かわいくない。何のとりえもないよこの子」
全否定かよ。
「そんなことありません。かっこいいです」
え、あ、そう？
「へええそう。かっこいいんだー。かっこいいんだってー。よかったね蒼輔、ひゅーひゅー」
「ちょ違、そんなんじゃなくて、ただ見てくれだけのことを言ったというか、異性としてどうとかじゃないっていうか」
……あーそう。
要するにお世辞ですかそうですか。
「あ、蒼輔。いや、それも違って、清美先生にからかわれてとっさにそういうことにしただけというか、……ってもう、なんでわたしこんなにいっぱいいっぱいになってるんですか。まだ会ったばかりなんだから、好きも嫌いもないですよ」
「じゃあ将来的に可能性はある、と」
「まあ、その……」
「うーんいいねえ。青春かわいいねえ」

なんだこの人のテンションは。
「じゃ、蒼輔。あんたはどうなの？　朱姫ちゃんのこと、どう思ってる？」
「こっちに振るな」
「かわいいと思ってんでしょ。どうなの、ほれほれ」
「こんな話してもしょうがないだろ。ほら、ようやくバスも来た」
「ふーん。否定はしない、と」
「どうとでもとれ」
「じゃ、蒼輔とはここでお別れだね。清美先生たちは車ですか？」
「そうだよ。私の運転で送ってやる」
「それじゃ、清美先生。じゃあね蒼輔、また会えるといいね」
「ああ。同じ学園なんだ。会う機会もあるだろ」
「というか同じクラスになれるといいね。じゃ」
……行っちまったか。

同じクラスか……。
そりゃ、朱姫と同じクラスになりゃ楽しい学園生活なんだろうけどな。
「惚れたか？」
うわ、びっくりした。
「あーもー完全に目が恋する男の子じゃないのー。蒼輔、この、この。隅に置けないんだー」
まだそのキャラ続けるのかよ。
「俺の名前は呼び捨てですか」
「いいじゃない。そのかわり、私のことを清美おねいさんと呼ぶことを許可する。というか呼びなさい。これは命令。それに、敬語も必要ない。そんなもん、面倒くさいだけ」
……学生にもそう言って取り入ってるんだろうな。
「まーそうね。惚れるのは仕方ないさ。それは仕方ない。なんたっ

て朱姫ちゃん、学園でもトップ10に入るくらいのかわいさを誇るからねー」
「まだこの話続くのかよ」
「感触からしたら脈アリって感じだったねー。押したら意外といけるかもって感じだったねー。その後どうなったたか、かわいい報告よろしくねー蒼輔」
「勘弁してくれよ」
「でもね、恋人作るのはやめときな。恋人だけじゃない。これから先、気の合う人間も背中を任せてもいいと思える人間もできるだろうさ。でも、友達も恋人も作るな。いいね」
「理由は？」
「信頼はいつか必ず裏切るものだからさ。これは先輩からの教訓。さ、さっさと車に乗っちゃって。それからかわいらしくこれからのことを説明してあげる」

第四話：入寮

開拓地、って印象だ。讃神島はただの大地や林だった場所を切り拓いて学園に仕立て上げた場所らしい。車の窓から見えるのは林立する木々に碌に舗装されてない道。時折視界が開けたと思ったら教棟らしい建物が姿を現す。

ここは元々、無人島なんだよな。……なんでそんなところに学園なんか建てるかな。

道が舗装されていない上に清美お姉さんがスピード出しまくるから、ちょっと酔っちまった。気分が悪い。勘弁してほしいな。

小さな建物の前で清美お姉さんが車を止めた。

「ついたよ」

ここが第一寮だということなんだろう。

「要領は今話した通りだ。ま、せいぜいかわいくやんなさい」

どうやれってんだ。

「大丈夫だ。やるべきことは過不足なくやらせてもらう」

「当たり前だ。……それじゃね、蒼輔君」

「ああ、清美おばさん」

「おねいさんと呼べって」

いて。叩くなって。

……行ったか。

「これが学生寮、俺が今日から寝起きする場所か」

かなり古臭く見えるな。あちこちひびや汚れが目立つが、なんとか住むには問題ないというところだろう。三十部屋くらいはあるんだろうか。

こんなところでこれから寝起きしなくちゃならないのか。全く、勘弁してほしい。

ああ、あれが管理人室か。
「おや、あんた見かけない顔だね。誰か訪ねてきたのかい？」
腰の曲がった、人の良さそうな老婆だ。この人が寮の管理人なんだろうか。
「今日からこの寮でお世話になる吾川蒼輔です。まず管理人さんに挨拶しろといわれていたんですが」
「さて、入寮者の予定なんかあったかねえ。ちょいと、そこらへんに座っていてよ。ほれ、コーヒーでも淹れてあげよう」
独特の間合いを持った、というか動作の遅い人だな。こんなんで管理人が務まっているんだろうか。コーヒーなんていらないから、さっさと部屋に入れてほしい。
「さ、熱いから気をつけてお飲み。お菓子もあるからたんとお食べ。それで、あんたは何の用だったかねえ」
勘弁してくれ。
「今日入寮する……ああ面倒くさい。悪いがちょっと見せてもらう」
ポリポリとお菓子を食べながら、管理人は座り込んでしまっている。
さて、入寮予定者の書類なんかは……これか。
502号室、か。ついでに、部屋に住んでいる人間の名簿なんかも見せてもらおう。暗記するにはちょっと多すぎるな。
「どうしたい、名簿なんか見て」
うぉっと。
「す、すいません。個人情報ですよね、こういうのって」
「さあ、別にいいんでないの？　名前とクラスくらいしか書いてないんだし」
そう言われればそう、だな。
「4月から学園入るんかい。なんて言ったかな、あ、あがさ」
それじゃ推理作家だ。
「吾川です。吾川蒼輔」
「わたしゃ、見ての通り寮の管理人だ。でーも見ての通り老いぼれ

でね、あんまり問題なんか起こしてもらわないほうが助かるってわけよ。ほれ、５０２号の鍵だ。問題があったら、できれば生徒たちで解決してほしいんだよ。生徒自治っつーかね。なんならあんた、寮長やるかい？」
「そういうのは勘弁です」
「そうか。そういや寮長はこないだ神田君に任せたんだったかな？　そうかそうか。ま、あんまり問題起こさないようにやんなさい。問題があったら神田君に言うんだね」
「寮規みたいな、聞いとかなきゃいけないことは？」
「そういうのも、ぜーんぶ神田君に聞きなさい」
おいおい。
神田、か。名簿にそんな名前があったかな。
確か、神田京一。さて、どの号室だったか。
わ、階段の手すりの塗装が剥げている。他にも、全体的に汚れが目立つな。
ま、明るい場所は苦手だから別にいいんだけど。
一本電灯が切れてんな。あの管理人じゃ仕方ないか。
５０２……ここか。
「そこは空き部屋だよー」
ん、誰だ？
おとなしそうな男子だ。一見、子供っぽく見えるが、年齢は同年ぐらいだろう。寮生の誰かだろうか。
「空き部屋なのか？」
「うん。たぶん、会ったことはない人だよね。どこの寮の人？　誰か訪ねて来たの？」
「その前に、そっちは誰——」
いや、人の名前を聞く前にまず自分から、か。
「……俺は吾川蒼輔。今日からこの５０２号室に入るんだ。そっちは？」
「ああ、入寮する人だったんだー。それはごめんねー」

なんか間延びした空気のやつだな。
「僕は神田京一。京一でいいよ。この寮の寮長をやってるんだ。よろしくねー」
こいつが寮長をやってるっていう神田京一か。寮長って割にはあまり頼りになりそうにない。
「だったら俺も蒼輔でいい。よろしく」
「でもおかしいな。今日入寮者がいるなんて聞いてなかったんだけど」
「そうなのか？　こっちは今日の入寮はもう一週間も前から聞いてたんだけどな」
「うーん、管理人さんは教えてくれなかったな。管理人さん、人に寮長押し付けておいて、あんまり仕事してくれないんだ」
京一、なんか人の良さそうなやつだな。
「寮に入るにあたって、なんか聞いておくことは？」
「さて、なにかなぁ」
考え込んでいる。どうも、何かの長って感じのないやつだ。
「まあ、大きな事件とか起こさない限り、自由にしててくれればいいよ、たぶん。第一寮はゆるい寮だから」
大きな事件、か。
「でもあんまり遅くまで出歩かないほうがいいかな、たぶん。門限も厳しくなったし、他の寮に行くにもやかましくなったから」
「どういう意味だよ」
「ああ、あんまり気にしないでよ。特に、まだ学園に慣れていない人にする話じゃないから」
学園にとってのネガティブな話題か。
……少し石を投げてみるか。
「学園内にはずいぶん深刻な対立があるらしいな。赤組と青組だったか？」
さて、どんな波紋が広がるか。
「へえ、よく知ってるね」

――案外、表情が変わらない。
手ごたえなし、か。
「言っとくけど、そういう話は誰かまわずにしないほうがいいよ。相手が赤組か青組の関係者だったら、たぶん大変なことになるから」
「どうなるんだ」
「半殺しかな」
あっさりと言ってくれる。
「マジかよ」
「まさか。だけど、青の誰かが、自分たちのことを茶化してきた人をリンチしたって、そういう噂があるんだ。噂だけなんだけど、たぶん本当だと思う。赤や青、特に赤とはあんまり関わらないほうがいいよ」
おいおい、なんて学園だ。勘弁してくれよ。
まさか京一が赤組か青組だって言うんじゃないだろうな。
「京一は何組なんだ？」
「心配しないでいいよ。僕はほら」
京一は襟のバッジを指差す。
黄色だ。
「正確には高等部普通科の元一年三組。たぶん新学期も黄だろうけどね」
「黄組ならそんな対立とか事件なんかはないってことか」
「黄はエリートじゃないからね。メンバーも割りと流動的だし」
「そりゃ良かった。で、門限が厳しくなったってのは？」
「気にしないでいいよ。たぶん、新入りに話すことじゃないからね。それはおいおい」
「気になる」
「参ったな。学園に対して妙な悪印象を持たないでほしいんだけど、言っちゃった僕が悪いか」
「大丈夫だよ。どんな悪いことを聞いたって、それで何かを判断することはない」

「実は、カクカクシカジカ」
「へーえなるほど。って、伝わるか」
「実はさ、失踪事件があったんだよ」
「失踪……か。誰かがいなくなったのか」
なるほど、それで寮の門限が厳しくなった、か。
「そう。去年の今頃くらいからかな。一人また一人といなくなって、もう１０件ちかくそんなことがあるよ」
「てことは、集団失踪事件ってわけだ」
おいおいそりゃ聞いてないぞ。
「失踪事件があったのは知ってたが、一人だと思ってた」
「へえ、よく知ってたね」
「どっかの雑誌に報道されてたんだ。確か名前は見澤灯」
「そうだね、灯さんもいなくなった。去年の暮れ急にいなくなって、それっきり。彼女は同級生だったから、僕も心配してるんだけど」
「どうして他の学生の話は報道されていないんだろう」
「規制されてるんだよ、たぶんね」
間延びした人柄の割りに、きっぱりと言うな。
讃神学園は政界に太いパイプを持った有名私立学校だ。失踪なんていうスキャンダルに神経質になってもおかしくはない。
「失踪者はどうなったんだ」
「まだ誰も見つかっていなかったと思う」
「見澤って子も？」
「うん。もう４ヶ月くらいになるのかな。だからちょっとしたミステリーなんだよね」
「どういうことだよ」
「たぶん失踪なんてできるはずがないんだ。だってここは島なんだから」
「つまり、島から出た形跡がない？」
「そう。島から出るには定期便を使うしかないのに、灯さんが船に乗った記録がない。彼女を船で見た人もいない」

「定期便以外で出た可能性は？　私的な船がこの島を訪れることはないのか？」
「たぶん、少なくとも灯さんがいなくなってからはないよ」
「なら、見澤はまだこの島に残っていることになる」
「たぶん、そういうことになるね。だけど４ヶ月にもわたって誰にも見つかっていない。島に潜んでいるとして、考えられる？　食事や睡眠はどこでとっているの？」
　だからミステリーか。
「とすれば協力者がいると見るのが合理的だな。誰かが見澤をかくまっているんだろう」
「そうなるよね。だからみんなもそう思ってる。だからクラス間の空気もちょっと疑心暗鬼なんだよね」
「実際にかくまうような人間は？　見澤と仲の良かった友達とか」
「何人か調べられたよ。先生から話を――クラスのみんなは事情聴取だって言ってたけど――聞かれたし、寮も調べられた。だけど手がかりはなし」
「かなり上手くやってるんじゃないか？」
「そうかな。そうかもしれないけど、たぶん、難しいと思うんだよね。なんせ閉鎖的な島だから」
「そうか。だったら島外の人間が、失踪の手引きをしたってことは？　彼女と仲のいい部外者が、定期便以外の方法で島外へ連れ出す」
「考えられなくはないけど、でも誰が？　僕らは普段島から出ることなんてないんだよ」
「当然、見澤の家族にも連絡がないんだよな」
「たぶんね」
　……それが失踪だからな。
　だが、彼女が何か島で不都合な状況にさらされていたとしたら？　そして家族に助けを求め、学園に連れ戻されることを恐れた家族は彼女をかくまう――
　ないな。学園に戻りたくないなら退学すれば言いだけの話だ。わ

ざわざ家族がかくまう必要はない。
　だが、他の部外者がいるという可能性は捨てきれないな。島内に留まっている可能性を含め、彼女の交友関係を確かめておく必要がありそうだ。
「見澤と一番仲の良かった友人は？」
「会いたいの？　……やけにこの事件に興味があるんだね」
　確かに不自然なくらい興味を持っているように見えるだろうな。
「推理小説とかが好きなんだ。俺の灰色の脳細胞を駆使してみたくてしょうがないんだよ」
「……ふーん。だったら、灯さんの失踪について、ちょっと調べてみる？　ただ、もうずいぶん時間が経ってるから、たぶん手がかりなんかもあんまり残ってないと思うけど」
「ああ、でも京一に迷惑かけるつもりはない」
「いいよ。灯さんのことは僕も気になってたからね。できるだけのことは協力する」
　ありがたいな。まだ京一を全面的に信頼するつもりはないが、いい奴なのは確からしい。
「たぶん、一番仲良かったのは住吉穂乃歌さんかな。いつも一緒にいたから。蒼輔も黄組になれればいいんだけどね」
「どうしてだ？」
「僕も穂乃歌さんも灯さんも、黄組だったからだよ」
　なるほどな。
「ま、明日にでも住吉さんには会わせてあげるよー。ついでに学園内の案内も出来るし。今日は疲れてるだろうから、じっくり休みなよ」
「そうだな。とりあえず一休みするか。……門限があるんだったか？」
「最近決められて、９時。でも、たぶんそんなに気にしなくてもいいよー。形だけのものだから」
「そうなのか？」

「過ぎたからって締め出すわけには行かないし、ほら、うちの管理人さんはああいう人だから」
確かにあのばあさんが説教するところは想像できないな。
「いや、まあ、寮長としてそういうこと言うのはどうかと思うんだけどー」
「なに、見物を兼ねてちょっと散歩でもしようかと思っただけなんだ。９時だな。覚えておくよ」————

————飯も食ったし、少しは疲れもとれたな。
静かだな。昼も静かだったが、夜の林の中の静けさってのはちょっと不気味だ。
月がでている。月明かりで、いい感じにほの明るい。
やれやれ、これで首尾よく明日から見澤灯探しが始まるわけだ。
あの神田京一ってやつはいいやつそうだな。知り合えてよかった。
見澤探しにも協力してくれそうだし。幸先いいな。
……さて、少し歩くか。

第五話：廃校舎

林、林、林、か。
さすがに元無人島。何もない。
しばらく歩いているのに誰にも出会わないのは、もう夜だからだろうか。
まだ春休みだし、まだ実家に帰省している生徒が多いのかも知れない。
あまりにも何もないせいでここがどこかわからなくなりそうなものだが、あちこちに道案内の看板が立てかけてあるおかげで、迷う心配だけは全くない。さすがに島全部が学園なだけはある。
ちょうどいい月夜だ。
少しでも地形を把握するため、と思ったが、気持ちのいい散策になったな。
ん？
大きな建物だ。こりゃどうも校舎だな。
やけに老朽化してやがる。
おいおい、こんなところで授業受けるのか？　勘弁してくれよ。
と思ったら、看板がある。
……なになに。
老朽化により使用中止。危険、立ち入り禁止。か。
つまりこいつは、いわゆる旧校舎ってやつだな。
さすがにこんなとこで授業受ける必要はないということか。やれやれ。
ん？
今何か影が通りすぎたようだな。
校内だったみたいだが。
……月夜に、旧校舎に、怪しい影。
こりゃ、どう考えても、アレだよなあ。

別に怖くはないが、ほんとのほんとに怖いとかそういうんじゃないが、うん、君子危うきに近寄らずという先人のありがたい教えもあることだ。勘違いしないでもらいたいのは、決して臆病心にふかれたとか肝の小さい男とかいうわけではなくわざわざ不可解なものに近寄る必要は全くないということでうんたらかんたら——

——？

……今、何か聞こえたな。

ポルターガイストとか、そういう類のもんじゃない。

……聞こえないな。気のせいか？

！

やっぱり、何か聞こえる。

……人間の声だ。

途切れ途切れで、聞こえづらいが、これは確かに人の声だ。

……くそ、なんて言ってるのかまではわからない。

だが、切迫感があるのはわかる。

やれやれ、勘弁しろよ。

なんだって今日はいろんなことに巻き込まれちまうんだ。

見て見ぬ振り、ならぬ聞いて聞かぬ振りしたいところだ。でも、そんなことしたら寝覚めが悪いんだろうなあ。

……ちくしょう。行くか。

よっと、この程度の門、乗り越えるのは楽勝だ。

……また、声がしなくなったな。

ちくしょう、これで校舎の中で男女がプロレスごっこしてたら泣くぞ。

……暗い、が、月明かりのおかげでなんとかなりそうだ。

さび付いた壁に、埃だらけの床。やはりここは廃校舎なんだな。

なにより、人がいたっていう感覚が全くない。普通建物には、気配とか、霊魂とか、そういう類のもんが染み付いてるもんだ。

……音はどうやら、この教室のほうから聞こえてくるみたいだ。かろうじて読める限りでは、音楽室のようだな。

ドアを少しだけ開けて中を覗いてみよう。ガタ、おっと、少し音がしちまった。だがこのくらいなら聞こえてないはずだ。
……中にいるのは三人……が輪になって、何かを囲んでいるようだ。三人とも背中を向けていて、顔はわからない。見た印象では、全員男――男子学生のようだ。
机や椅子なんかは取っ払っちまって、中はだいぶ広い。
――なにを囲んでいるんだ？　ん？
「これに懲りたら、次はちゃんと金を用意しておくんだな。今度はこのくらいじゃ済まないぞ」
正面の男が、何かを何度も蹴り上げているようだ。
なんだ――うめき声？！
どうやら、囲んでいる中にいるのは、人間のようだな。
さっきのせりふから推測すると、かつあげ、つまり恐喝ってやつか。
勘弁しろよ。全く、いけ好かないやろうがいるもんだ。
ちっ、三人か。面倒に巻き込まれるのは勘弁だが、ここまできたら仕方ない。
ガラッと、今度は大きく音を立ててドアを開ける。よしよし、連中びっくりしやがったみたいだ。
「おいおい、ここは廃校舎だって書いてあったのに、どういうことだ。てめえら一体何の授業してやがる」
「誰だよてめえは」
「正義の味方だ。がらじゃねえけどな」
しーん。ありゃ、ちょっと外した？
「一応聞いとくが、お前らみんな仲良しこよしでじゃれあってたってわけじゃないんだろう？　そこに誰かいるみたいだけど、ちょっと見せてくれないか？」
三人は無言で、少し距離を置きながら俺を囲む体制に入った。うろたえもしない。なかなか度胸のあるやつらだ。
隙間ができたので、蹴られていた対象が見えるようになる。暗く

てよく見えないが、やはり人間……うずくまった人間のようだ。
やつらは緊張して、今にも飛びかかってきそうなのがわかる。
「お前らさあ、やるにしても、もうちょっと、ちゃんと確認しといたほうがいいんじゃないか？　俺がお前らの仲間だったらどうすんだ？」
「やかましい！」
正面のやつだ。
「見られたからにゃ、そのままにしとくわけにはいかねえ」
「こりゃいい。明らかに悪役のせりふだ。どうする気だ？　まさか縛って沈めるわけじゃないんだろ？」
「怖くて、しゃべれないようにしてやるさ」
かつあげされてたやつも、そうやって恐怖で縛り上げて、金を巻き上げてたんだろう。
「お前らさあ――おっと」
しゃべってる最中に殴りかかってくるのは、反則じゃないのか？
「お前らさあ――自分たちの名前を知ってるか？　お前らみたいなのを人間の屑って言うんだぜ」
返答もなく、ただひたすらに殴りかかってくる。ただ、あまり連携がとれていないせいで、大した脅威じゃない。
タイミングが合ったところで、右ストレートをお見舞いしてやるや。
……手加減はしたが、もう立ち上がれないはずだ。
「おい、なにやってる。おい」
たった一撃で床に倒れこんだ仲間に、別のやつが呼びかける。
その隙に一気に間合いをつめ、掌底を繰り出す。
――気を失わないながらも、意識がぼんやりしちまうはずだ。
「な、なにやってんだ。おい、おい」
残ったやつは、もう余裕がなくなってきたみたいだ。やれやれ、多少は慣れたやつらだったみたいだが、所詮は素人、か。助かった。
「どうする？　まだやるのか？」

「ち、くしょう！　お前はなんなんだよ」
「言ったろ？　正義の味方だ」
しーん。ま、拍手を期待してたわけじゃないけど。
「面倒だから、もうどっか行けよ。安心しろ、後ろから襲い掛かったりしないから」
少し躊躇っているな。もう少し待つ。よし、警戒しながらも、仲間を介抱して、ちゃんと逃走するようだ。
……行ったか。
全く、勘弁しろよな。ほんと、勘弁しろよ。今日の運勢、最悪なんじゃないか？
「大丈夫か。だいぶ、手ひどくやられたみたいじゃないか」
髪は乱れ、服も乱雑に跳ね飛ばされ、何より、体中が痛むんだろう、ぼろ雑巾のように横たわりながら、必死で体を縮めている。月明かりの中、恐怖で、小刻みに震えているのがわかる。
「どうだ？　立てるか？　いつまでもそんなとこに寝そべったままじゃ、治るもんも治らないからな」
……どうやら、傷はたいしたことはないらしい。顔には大きな青あざがいくつもできているし、おそらく服の中も同じ様子なんだろうが、骨折や大きな切り傷なんかは見られないようだ。
「これなら、二三日安静にしてたらすぐ良くなるさ。ほら、いい加減起き上がれよ。……よし、寮はどこなんだ？　実は、俺、自慢じゃないが、今日初めて島に来たから、島内の地図が全くわからん」
どうも、梨のつぶてだ。もう少し会話のキャッチボールをしようぜ。
体の傷はともかく、精神的に参ってるんだろう。
外に出て、どこに行けばわからないので、なんとなく足に任せて歩く。月明かりで、木々や地面や空は青白く輝いていた。
「あいつらの名前は知ってるのか？　どうする？　訴え出るなら証言してやってもいいぞ。このままじゃ、君も仕返しが怖いだろ？
そういえば、自己紹介がまだだったな。なんか今日は自己紹介して

ばっかだ」
　まだ返答はないが、少しは表情が和らいできたみたいだ。
「俺は吾川蒼輔。高等部二年だ。転入生なんで、見ての通り、バッジは無し。バッジでクラスを判別できるなんて、変わった学校だよな。君は……月でよくわからないな。赤か？　なんだ、優秀なんだな。優秀なんだろ、赤組って？」
「赤がなんだっていうんだ！　赤なんかに入らなければよかったんだ」
　ようやく口を開いたかと思えば、吐き捨てるような口調だ。
「さっきのやつらも、赤組か？」
「……」
　やれやれ、また沈黙か。
「ま、やつらのことはどうでもいいさ。あんなやつらは無視しといて、君はさっさと怪我治して、元気に学生生活送らないとな。新学期では、クラス替えがあるんだろ？」
　けど、クラス替えがあっても、やつらと離れられるとは限らない、か。
「俺もなるべく力になるよ。さっき見ての通り、俺暴力には自信があるんだ。って、そんなもんマジで自慢にはならないけどな」
　やれやれ、いつからこんなおせっかいになったんだ？
「それに、緑組のやつと黄組のやつに知り合いがいるから、もし君がそいつらと同じクラスになったら、よろしく言っとく。ま、だから気楽にやることだよ。寮はどこなんだ？　たまに様子見に行く」
「いいよ。そんなことまでしてくれなくて」
　全くだ。だけど、少しは心を許してきたみたいだな。
「ちなみに、俺のことは蒼輔でいいぞ。島に来て会ったやつがフランクなやつばかりだったから、もうそれで通そうかと思ってんだ。……変かな？」
「……変じゃない」
「じゃ、俺は君のことはなんと呼べばいい？　今ならお兄さん、リ

クエストに応えちゃうぞ？　ああでも、ダーリンとかマイハニーとかは勘弁な。そっちの趣味はないんだ」
　お、よし、少し笑ったみたいだ。
「どうした？　急に立ち止まって」
「ありがとう。でももうここまででいいよ」
　過剰な親切は返って迷惑、か。
「わかった。でも二三日安静にしてろよ。あと、あいつらのことは気にすんな。ああいうのは、あっちがどうかしてるんだ」
「うん。僕もそう思う。ありがとう」
「よし、少しは顔色がよくなったみたいだな。じゃあな。ああちょっと待てよ。結局君の名前はなんなんだ？」
「……清澄利春。なんと呼んでくれても構わないよ」
「じゃ、気軽にマイラバーとでも呼ぼうか」
「……」
「普通に利春、でいいよな。じゃあな利春」
「うん。ほんとにありがとう……蒼輔君」

第六話：朝

……なんだかうるさいな。
……見慣れない部屋だ。ここはどこだ？
ああ、そうか、昨日から讃神島へやってきてたんだった。
室内は少しひんやりする。殺風景だ。まだ、荷物もなにもないからな。床に敷かれた布団だけが、この部屋の持ち物だ。
……なんだよ、うるさいな。どこが鳴ってるんだ？
ドアのほうだ。誰かがドアを叩いている。
今何時だよ。……１０時だ。こりゃ、起きてない自分が悪いな。
「誰だよ」
蒼輔はドアを開ける。
「おはよう、蒼輔」
「京一か」
「もしかして、まだ寝てた？」
「まさか。朝も１０時間過ぎてるって言うのに、寝ていたわけがないだろう」
「寝癖。それに、たぶん声が寝起きだよ」
……やるな。
「なんでドア叩くんだよ。チャイムがあるだろ？」
「ないよ。残念ながら」
ないのかよ。やれやれ、勘弁してくれよ。
「たぶん１０時には迎えに行くって、約束したはずだけど、忘れてた？」
「いや、わかってたよ。ただ、目覚ましを持ってくるのを忘れちまったんだ」
「そっか。初日だから仕方ないかもね。よく寝れた？」
「ああ、全面フローリングに暖房設備はなし、おまけに隙間風がびゅんびゅん吹くおかげでよく寝られたよ。全く、大した高級住宅だ」

「でも、入寮するのに荷物もないなんて、ちょっと用意が足りないんじゃない？」
「そのうち届くだろうさ。寝起きができれば、俺はそれでいい」
「豪胆なのかずぼらなのか……」
京一はちょっと呆れてるみたいだ。
「朝ごはんはどうする？　食堂に行けば食べられるけど……もう時間過ぎちゃったかな。パンなんかなら購買で売ってるけど」
「いいよ。このあと予定があるんだし」
「もうすぐお昼の時間になるしね。教室を案内する予定だったけど、先に食事にしようか」
「ちょっと待っててくれ。すぐ支度する」
京一を待たせて、部屋の中に入る。
と言っても、顔を洗って着替えるくらいのもんなんだけどな。
「お待たせ。それじゃ行くか」
寮を出ると、新鮮な空気が肺の中に入ってくる。今日は晴れか。
「今日はどこに行くんだ？」
「第三講義部。授業が行われる教室とか、体育館とかがあるところだよ。僕らの普段の生活の中心部になるところだね。特に運動組とか芸術組は別のところで活動することも多いんだけど、普通組の生活は大体そこになる」
「部っていうのが、一まとまりの大きい単位を表すんだな」
「そう。講義棟や体育館、運動場、その他講義棟を中心として学生生活に必要な施設が集まった場所を総称して高等部第三講義部。第三は黄色組だけが入っているから、黄色学校なんていう言い方もされるけどね」
「つまり、同じような講義部があと三つあるってわけか」
「そう。第一から数えて、赤組、青組、黄組、緑組の講義部。だから、クラスが変わったら実際に生活の場所まで変わるから、案外大変なんだよね」
「講義部、というか学校以外の施設もあるんだろう？」

「うん。音楽室とか美術室ばっかり集まった場所とか、陸上競技場とか大きなグラウンドなんかが集まった場所があるよ」
「そういう施設があることが、讃神学園の最大の特色か」
「そうかもね。特に競技場なんかは、ここでオリンピック開けるんじゃないかってぐらい」
国内有数の選手を輩出している秘密も、その練習設備の豊かさにある。
「でも、普通の講義部もいいところだよ。広くてゆったりしてるし、特に黄色や緑学校は比較的新しい施設だから綺麗だし」
「てことは、赤や青の建物は古いのか」
「あー、そうでもないな。そういや最近改修されたって言ってたから。学園内の施設で、昔の色を残しているのはこの寮くらいだよ」
「……てことは他の寮は綺麗なのか」
「ここも改修の要望は出してるはずなんだけどね、たぶん」
やれやれ。
「とにかく今日は今から第三講義部、――黄色学校へ向かうわけだ」
「うん、僕も穂乃歌さんも一番勝手知ったる場所だからね。蒼輔君も黄組になれば、今日の案内が無駄にならなくて済むんだけど」
「学園内はバスが出てるんじゃないのか？」
「休暇中はあんまり本数がないから。黄色なら、たぶん歩いてもそんなに遠くないよ」
のんびりしたやつだな。
でも、島の風景を記憶できていいか。
……お、こりゃなんだか古びた建物だぞ。
これは――
「廃校舎か」
「ああ、そういえばそんなものがあったねえ」
「ここは何の施設だったんだ？」
「いや、知らないなあ。僕がこの学園に入ったときから、ずっとこんな感じだからね」

「赤とか青の講義部だったってわけじゃないのか」
「うーん、場所が移動したって話は聞かないけどな」
これも過去の遺物ってわけか。だったらさっさと撤去しろよ。
春眠暁を覚えずとはよく言ったもので、春の暖かい空気だ。
道の脇をたんぽぽが咲いている。
しっかし、道を舗装する予算はなかったのかよ。でこぼこが激しくて歩きづらい。ほんと、勘弁してくれよ。

「京一、失踪事件について、もう少し詳しく教えてくれないか？」
「そう、それなんだけど、ちょっと考えてみたんだけどさ」
ちょっと改まった口調だ。
「灯さんのことが雑誌に載ってたってのは、本当？」
「どうしてそんなことを聞くんだ？」
「他の失踪が外部に漏れてないのに、灯さんだけ載るのはなんか変じゃないかなと思って」
「ふむ。でも実際俺が知ってたんだから、それ以外考えられないだろ？」
「考えられるよ。例えば……蒼輔が、灯さんの家族の知り合いだったとか」
「なるほどな。知り合いが讃神学校に転入するのをこれ幸いと、自分の子供の捜索を頼んだわけだ」
「たぶん、ありえないって話じゃないよね」
「残念ながら、俺の言ってることは本当だよ。確かにどっかの雑誌で見たんだ。なんなら探してやってもいい」
「いや、ごめん。疑うつもりじゃなかったんだけど、気を悪くしたよね」
ちょっと、慌てた様子だ。
……いいやつなんだな。
「全然。政府高官と知り合いなんなら、俺の人生ももうちょっとば

ら色になるんだろうけどな」
「政府高官？」
「見澤灯の両親だ。……そうだ、そう雑誌に書いてあったんだな」
「知らなかったなぁ」
「そうか、だから見澤の失踪だけが取り上げられたんだ」
「なるほど。政府高官の子供が失踪したとなれば、一級品のスキャンダルだね」
「だから見澤だけが記事になり、他の失踪は無視された」
「話のつじつまは合うね、たぶん」
「しかし、讃神学園ってのはエリートの子女も通ってるんだな」
「うーん、灯さんの家がそんな家庭だったとは知らなかったな。ただ、ここはいろんな人がいるからね。僕みたいな、平凡な家庭の凡人もたくさんいる」
「そんなことを言えば、俺も一緒だよ。首尾よく見澤を見つけ出したら、謝礼でもせしめとくか」
「いいね。将来就職先を世話してもらえるかもしれないなぁ」
　現実的なこと言うなよ。
「見澤灯以外の、失踪した人間についてもう少し教えてくれないか？」
「うーん、僕も詳しくは知らないからなぁ。知っている範囲でよければ」
「今のところ、何人の生徒がいなくなったんだ？」
「灯さんを入れて、六・七人くらいだと思う、たぶん」
「失踪時期は？」
「バラバラ。同時にいなくなったって人はたぶんいなかったと思うよ。最初の人がいなくなって、ちょっと生徒の間でも動揺があってさ。それで落ち着いてきたかな、って時にまた次の人。しばらくしてまた次の人。その繰り返しだよ」
「全員共謀していなくなったっ可能性は？」
「どうかな。いなくなった人は学年もクラスもバラバラだったと思

うよ、たぶん。灯さんにしても、他の失踪した生徒とつながりがあったとは思えないし」
「失踪者全員に共通するようなことは？」
「わからない。いろいろ考えられてはいたみたいだけど、特にめぼしいものはなかったんじゃないかと思う」
「全員、まだ見つかってないんだよな」
「うん」
「そして全員、島から出た形跡もない？」
「そうらしいね。島から出るには定期便を使うしかないのに、誰も使った様子がない」
「ということは、全員まだ島内にいると考えたほうがいいんだろうな」
「でも、それもかなり難しいよね」
「可能性の問題さ。島は確かに広くはないが、七人が隠れられないほどじゃない。見ての通り林も多く残っているんだ。隠れる場所ならいくらでもある」
そう、隠れる場所はある。
例えばあの廃校舎はどうだ？　きちんと捜索すれば、何か出てくるかもしれない。あの廃校舎以外にも、似たような場所はあるんじゃないのか？
「でも、隠れおおせたとして、それからどうやって生活するの？　最初の人だともう一年近くになるんだよ」
京一の言うとおりだ。食事や着替えの問題がある。
「協力者がいると考えれば、何とかなるかも知れないな」
「学生には無理だよ。だとしたら疑うべきは……先生たち？」
「いや、学生に無理と決め付けるのは早計だな。一人では無理でも、大勢でやれば出来るかも知れない」
「うーん……」
「そう考え込むなよ。俺だって言ってることが不可能に近いことはわかってる。でも探し出すつもりなら、頭を柔軟にしておかなくち

ゃいけない」
「それに、灯さんの場合はもう一つ不可解な点があるんだけどね」
「なんだよ」
「それはまた後で言うよー。……灯さん、探し出せるといいけどな」
……そうだ。早く探し当てないといけない。
ここでいうべきことじゃないが、失踪者の生活の問題を一掃してしまえる解答がある。
失踪者がもう死んでしまっているという解答だ。死んでしまっているなら、食事も住居も必要ない。
そんな展開は勘弁願いたいが、もしそうだった場合、この孤島には大量殺人者が潜んでいるってことになっちまう。
どうやら捜索はかなり本腰入れてやらなきゃならなくなってきたな。できるだけ早く見澤灯の行方を突き止めなくちゃならない。そんで殺人鬼がいるなんて疑い、さっさと払拭しちまいたいところだ。

「お、なんか建物が見えてきたな」
「ああ、あれが黄色学校だよ」
「住吉穂乃歌って子はどこにいるんだ？」
と蒼輔が京一のほうを向こうとした瞬間――
「吾川蒼輔って、君だねっ」
手に銃を持った女の子に声をかけられた。
「うーんとっ、動くな」

第七話：親友

長い髪をまとめて後ろから一本下げている。大きい瞳がニコニコしていて、彼女の明るい性格を感じさせる。
何故だか知らないがジャージ姿だ。しかも明らかにサイズが大きすぎる。本来襟につけるべきバッジを、この子の場合は肩口につけているみたいだ。
手にはこっちに向けられた銃。
「やれやれ、本当に物騒な学園だな」
「ほらほらっ、手を挙げな」
どう見ても目が本気じゃないんだよな。趣味の悪い悪戯だ。
ん、視線がちらちらしてんな。
……俺の後ろ――にいるのは、京一か。
とすれば……。
「これでいいか、住吉穂乃歌」
いきなり名前を言ってやる。
……よし、さすがにびっくりしたか。
「えっ、何であたしの名前知ってるの？」
やれやれ、当たりか。
「俺はベイカー街に住む天才探偵だからな」
ありゃ、きょとんとしてる。
「解答編の前に、物騒なもんは降ろしてもらいたいんだけど」
「ああ、これ？」
穂乃歌は俺から的を外して、空に向ける。
引き金を引いた。空気の弾ける鋭い音が響いた。うるさいな、こりゃ。
「偽物だよ」
「だからって、銃口を向けられていい気はしないな」
「ふぅん、意外と小心なんだね」

「意外も何も、初対面だろ？」
「そうっ。なのにあたしの名前がわかったのはどうして？」
「まず確認しておきたいんだけど、君が俺が今日会う予定だった住吉穂乃歌ってことで間違いないんだな」
「うんっ、住吉穂乃歌。穂乃歌でいいよ。そっちは吾川蒼輔だねっ」
握手か。
応じる。
「よろしくねっ、蒼輔」
やっぱりフランクなやつが多い学校だ。
「簡単だよ。まず、君は俺の名前を知っていた。昨日島に初めてやって来た俺の名前を知っている者は限られている。おそらく住吉穂乃歌は昨日京一から俺の名前を聞いていただろう。君は肩につけたバッジから同学年の黄組だ。もっといえば、京一の同級生だ」
「うん。そうだよ」
「キョロキョロしてる様子から考えて、京一の知り合いなのは間違いなかった。さらに、君の悪戯っぽい表情。視線は何かの合図をしてるんだと思った。おそらく、『何も言うな』だろう」
お、ちょっと照れたような表情だ。
「また、君はわざわざ俺を待ち伏せして悪戯を仕掛けた。ということは俺がこの時間ここを通ることを知っていなければならない。そうした全ての条件に当てはまるのは、俺と今日会う予定になっている住吉穂乃歌しかいない。ってわけだ。だな、京一」
「ご名答、だね。でも勘違いしないでほしいんだけど、僕はこんな悪戯のこと知らなかったんだよ」
「でも、ちゃんと黙ってたじゃないか」
「僕だってそのくらいの空気は読まないとねー」
やれやれ。
「で、この悪戯の理由はなんなんだ？」
「有名な、吾川蒼輔がどんなものなのか、試してみたかったんだ」
勘弁しろよ。有名になった覚えはないぞ。

「何の話だ？」
「昨日、定期便の中で赤と青に勝ったんだって？」
昨日の喧嘩の話か。
「俺は喧嘩の仲裁をしただけだよ」
「でも投げ飛ばしたんでしょうっ。それってすごいよ」
そうなのか？
京一もうなずいてるな。
「そーだね。筆ならともかく、本や靴が相手なら、すごいことだと思うよ」
筆とか本ってのはバッジによるクラスの傾向だな。筆が芸術組、本が一般組、靴が運動組だっけか。
「そんなに違うのか？」
「赤と青は基本的にトップクラスしか入れないからね。特に靴の赤や青なら、何かの種目の全国クラスの人間しかいないよ。そんな人間に喧嘩で勝つってのは、やっぱりすごいと思う」
「赤のほうが青よりも上だって聞いたけど？」
「一応ね。でも青にも怪物みたいなのはうようよしてるよ。僕ら凡人からしたら、どちらにせよ雲の上の存在だよ、たぶん」
「入れ替えがあるって聞いたけど、案外格差があるんだな」
「黄や緑から赤・青に行く人間もいるけど、すぐ帰ってくる子のほうが多いよ。逆に赤・青から黄・緑に来た人間は、すぐ戻っていく」
要するに、黄と青の間には超え難い壁があるわけだな。
「だから、蒼輔が赤や青に勝ったっていうのが本当なら、すごいことだと思う、たぶん」
「やめろよ、まぐれだよまぐれ」
それより、ちょっと気になることがあるな。
「どうして穂乃歌が昨日のことを知ってたんだ？」
「船での乱闘のことっ？　ルームメイトに教えてもらったんだ」
「ルームメイト……まさか、朱姫か？」
「ふぅん、もう名前で呼ぶ仲なんだ、朱姫と。朱姫も蒼輔って呼ん

でたなぁ」
　なんだよその顔は。
「名前で呼ぶってんなら、穂乃歌だってそうだろ。京一だってそうだ。そういう親密な関係ってのは苦手なんだが、仕方ないからここではそうすることにするよ」
「へぇっ。ま、京一から吾川蒼輔って人の話を聞いた後に、朱姫から同じ名前の人の話を聞いた。だからどんな人だか、ちょっと興味が出てきたんだ」
「それで模擬銃かよ」
「いいでしょうこれ。結構精巧に出来てるんだよっ」
「ミリオタか？」
「いやっ、人から貰ったもの」
　誰がそんなもの贈るんだよ。
「で、試してどうだった？　やっぱりただの凡人だっただろ？」
「どうかなあ。模擬銃とはいえ、いきなり凶器を突きつけられても平然としてるなんて、結構やると思うけど？」
「褒めるなよ。勘違いしちまう」
　やれやれ、勘弁しろよ。
「じゃっ、いい加減こんなところで立ち話もなんだから、構内に入ろっか」

　ふむ、ここら辺からは道もしっかり舗装されてきているな。
　植林で、構内がしっかりと形づくられているようだ。
　なるほど、ここが黄色学校というわけだ。さすがに校門まではないが。
「あの建物が、クラスの教室が入ってる建物。僕らは基本的にあそこで過ごしてるわけだね」
「向かい合ったこっちは？」
「音楽室とか、科学室とか、専門的な授業を行う教室が入ってる。

移動教室の際はあっちに行くわけだねー」
「で、あっちが運動場に体育館。あっ、蒼輔は初めて来たんだよね。ちょっと見とく？」
「なるほどな。確かに一個の学校がここにあるわけだ」
「あっちが図書室。向こうにプールもあるよ。今いる、教棟と教棟のこのスペースはちょっとした中庭だね。昼休みなんかにここで遊んでる子達がいるんだ」
これが第三講義部。通称黄色学校、か。
「で、これからどうするんだ？」
「食堂でも行こうか。たぶんもうお昼の時間だし」
時刻は……もう昼前か。
ふむ、食堂はこっちか。
そういや、俺はまだ朝飯も食ってないんだったよな。
「構内のレイアウトは、他の色も一緒なのか？」
「地形が違うからね。たぶん、配置は一緒じゃないと思うけど、あるものは一緒だよ」
「でもさっ、赤と青には休憩室とか、トレーニングルームとか、なんか高級そうな部屋がいくつもあるって聞いたけど？」
「クラスで格差があるわけだ」
ああ、ここが食堂か。綺麗な建物だな。中もさっぱりしている。
あっちが調理場で、カウンターでこっちと仕切られている。
「ここでメニューを頼めば、作ってくれるから。……あ、日替わり定食をー。で、作られた料理を持って、向こうの好きなテーブルで食べる」
「空いてるな」
当たり前か。今は春休みだ。
「でもっ、昼休みはいつもわやくちゃ状態になるんだよね。……おばちゃん、あたし親子丼っ。ここに黄色のみんなが食べにくるから」
「……カレーを頼みます。昼休みに満席になったらどうなるんだ？」
「ここで昼食をとる以外にも、購買で買うか、弁当を持ってくるか

があるからね。混むけど満席になることは少ないよ、たぶん。――どうも。じゃ、先に席取っとくね」
「寮なのに弁当？」
「寮母さんに作ってもらうか、自炊。寮にも台所があって、言えば貸してもらえるんだよっ。――どもですっ」
カレーと親子丼は同時に出てきた。早いな。
京一は……あそこか。窓際だ。ここなら風景が見えるな。
「ふたりは他の色になったことはないのか？」
「僕は一回だけ赤があるな」
「あたしはひと学期だけ緑があるよっ」
緑か。
「あっ、何だその目。言っとくけど、緑ではトップクラスの成績だったんだよ」
緑では、かよ。
「わかってるよ。成績でクラスが決まるが、成績が全てじゃない、だろう？　クラスの色で人を判断することはないさ」
「蒼輔のクラスは決まってないの？」
「まだ聞いてない。一度教員に会っておかなきゃならないから、そこで教えてもらえるんじゃないかと思う。後で行くよ」
「じゃ、この後職員部に案内するねー」
「京一は赤になったことがあるんだな。どんなクラスだ？」
「うーん、雰囲気悪かったよ。すごくギスギスしてて、人に勝つことばかり気にしてる感じだった。正直、黄に戻れたときはほっとしたもん」
「エリート教育ってのはいいことばかりじゃないもんだな」
「その中でも、会長はいい人だったな」
会長？
「生徒会の会長だよ。赤組でもみんなから一目置かれる存在だった。勉強も運動もトップクラス。それに僕みたいなはぐれ者にもよく声をかけてくれたし」

ここでもまた会長かよ。
「完璧超人かよ。いけ好かないな」
「そうかなー。僕は赤組に会長がいてくれて助かったけどなぁ」
生徒に人望のある生徒会長、か。後で会うことになるかも知れないな。
「そろそろ本題に入ろう」
穂乃歌の顔が、ちょっと強張った。
京一が黙ってうなずいた。穂乃歌に言葉を促したんだろう。
「……うんっ。灯の失踪のことだったね」
そう、それが本題だ。
俺は、失踪した見澤灯の居場所を突き止めなければならない。
「穂乃歌は見澤灯の友達だったんだって？」
「友達じゃないよ。……親友だった」
「そんなに仲がよかったのか」
「いつも一緒だったとは言わないよ。でも……灯とはなんか、波長が合ったんだ。しゃべるときの呼吸とか、なんでもないしぐさとか。隣にいてすごく居心地がよかった。灯とは多分これからもずっと親友でいるんだろうなって、なんだか知らないけど無条件で思えたよ。だから……困ったことがあったら相談したし、相談された」
親友、か。
俺にはよくわからない感情だ。
「いつからの付き合いなんだ？」
「中学一年。灯もあたしも、中一から讃神島にいるんだ。讃神島に来て、やっぱり家族と離れて暮らすから、最初の頃はさびしかったけど……、灯は同じ境遇だったし、だからなんか自然に仲良くなっていったな」
「見澤のことなら何でもわかる？」
「そうは言わないし、言えないよね。わかってたら、とっくに灯を見つけられてる」
「見澤が失踪したのはいつごろなんだ？」

「去年の年末。１２月……クリスマス・イブだったかな」
「穂乃歌のほかに、見澤の仲のよかった人間は？　特に男で」
「つまりっ、灯が駆け落ちしたんじゃないかってこと？」
「イブに失踪したなら疑って当然だろ？」
「でもっ、駆け落ちなら一緒にいなくなった男が必要じゃない？」
「後から男が追っかけるのかも知れない。その逆もある。いずれにせよ、可能性は全部疑ってかかるべきだ」
「うーん、それは……。……付き合ってた人はいなかったよ。ついでに言えば、２４日は冬休み初日だったよ」
「男じゃなくても、彼女の仲のよかった人間は？」
「あたしが一番だったと思うけど……それはわからないか。後で何人か教えてあげるね」
　さて、そろそろ核心だ。
「見澤が失踪した理由に、心当たりはないのか？」
　やっぱり、こういうのは、親友として訊かれたくないことだろうな。多分既に何度も訊かれ、また自問してきたことだろう。
「………わからない」
「見澤が悩んでいた様子は？」
「クラスでは上手くやってたし、成績も悪くなかった。むしろ今回の期末はよく出来たって言ってた。……わからないよ」
「失踪の理由は、やっぱり人間関係の悩みをまず疑ってみるべきだと思う」
　特に、見澤はまだ子供だ。金銭トラブルに巻き込まれたというケースは考えづらい。
「クラス内じゃなくても、他クラスの生徒とか教師とか、もしくは家族はどうだ？」
「わからない。……そういう相談を受けたことはなかった。わからないよ。灯、いつもどおり楽しそうに過ごしてたのに」
　ここは孤島だ。閉鎖環境で生活しているんだから、人間関係は限られてくる。だからこそ、他人との関係がこじれれば逃げ出したく

なることもあるだろう。
だが、穂乃歌の話を聞く限りでは、失踪する理由は見当たりそうにないな。
ちっ、勘弁してほしいが、何かの犯罪に巻き込まれたってケースのほうが濃厚になってきやがった。――見澤灯を無事に見つけられればいいが。

「どうする蒼輔。たぶん、そろそろ教員部に行く？」
「あっ、あたし今日は予定ないから、まだ大丈夫だけど」
「いや、とりあえず事件のことは中断しよう。悪いな、こっちの用で」
「ううん。じゃ、案内もかねてあたしも行くよ」
やれやれ、いいやつばかりだ。
ん？　なんかこっちに来るやつがいるぞ。
めがねをかけた女子だ。……誰だ？
「あなたが吾川蒼輔ですか？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1929x/

讃神学園事件

2011年11月13日03時26分発行